

小学校国語科翻訳教材の解釈に関する一考察

—スーザン・バーレイ「わすれられないおくりもの」の場合—

太田 寛士

1 はじめに

スーザン・バーレイ「わすれられないおくりもの」は教育出版の教科書に平成8年版から掲載のある作品である。日本語訳は評論社から小川仁央訳で絵本として出版されている。全国学校図書館協議会の選定する青少年読書感想文コンクールの課題図書に第33回（1987年度）の低学年の区分で選ばれていたり、同協会の「よい絵本」リストに掲載されたりするなど、教育の現場でも評価を受けている作品であるといえる。先行研究や実践では、大槻（2001）や平野（2003）などが見受けられるが、教材としての歴史は長いものとは言えず、未だ検討の余地を多く残す作品であるといえる。本稿において着目するのは「わすれられないおくりもの」を教室で読むことを想定した場合、当作品のみの読解では解釈の及ばない2つの疑問点である。

一点目は、「アナグマ」という存在についてである。日本人の読者にとって「アナグマ（Badger）」という動物は馴染みがない動物であるといえる。実際、日本にも同属の「ニホンアナグマ」という種が生息しているが、「タヌキ」と混同されるなど、その認知度が高いとはいえない。一方、作者スーザン・バーレイの活躍するイギリスでは、スーザン・バーレイ自身が「バヂャー（あなぐま）は、イギリスではよく知られた動物です」（『月刊MOE』127号、p.134）といたり、イギリスに在住する知人を介してイギリス人¹へのインタビューをしたところ、“There are a lot of badgers in children’s literature in Britain.”や“I don’t think that badgers are salient part of British culture, but there are few interesting thing about them.”といたりするように、文化におけるその重要度の認識はさておき、少なからず「アナグマ」という動物に対して何からの先行知識を有していることがうかがえる。そのことから、イギリス文学の他作品における「アナグマ」表象を検討し、当作品の読みと対応させることは、日本の読者にはない「アナグマ」のイメージから広がる「読み」を見いだせる可能性がある。

二点目は、「アナグマ」と「モグラ」の仲についてである。「わすれられないおくりもの」を読むと冒頭から末部にかけて、「モグラ」が「アナグマ」と特に仲のよい存在として強調されている印象をうける。しかしながら、この問題は「わすれられないおくりもの」の作品内でその理由は語られておらず、その根拠を明確に示すことは難しい。先に挙げた「アナグマ」の表象に関する問題と、この「アナグマ」と「モグラ」の仲の問題を核にししながら、一提案として「アナグマシリーズ」²を用いた読み合わせを考えてみたい。

¹ イギリス「University college London」の大学院に所属する大学院生2名（20代の男女1名ずつ）と広島大学教育学研究科所属のイギリス出身の先生にご協力いただいた。

² このようなまとめ方は管見の限り他でできてはいないが、本稿の記述においては登場人物や、舞台設定に共通点が多くみられる「アナグマさんのごきげんななめ」と「アナグマのもちよりパーティー」を含む三作品を「アナグマシリーズ」として扱うこととする。

2 源流としてのケネス・グレアム「たのしい川べ」

先に挙げたイギリス人3人へのインタビューにおいて、「「アナグマ」と言われて思い浮かぶ文学作品がありますか」という質問に対して、3人が共通してケネス・グレアム(1859-1932)の「たのしい川べ“THE WIND IN THE WILLOWS”」という作品を挙げている。

さらに、スーザン・バーレイ自身も、雑誌『月刊 MOE』のインタビューのなかで「たのしい川べ」について以下のように語っている。

私が生まれ育ったところは、あなぐまが住んでいるような田舎とはほど遠い場所です。(笑)あなぐまを描くようになったのは『たのしい川べ』のお話と出会ったからです。(『月刊 MOE』226号, pp.88-89)

教授はすでにバヂャーにまつわるお話をいくつか知っていました。私が絵本のための題材を探しているのを聞いて、すぐにヒントをくれたのです。私の絵を見て「バヂャーを主人公にしたお話に、君の絵がピッタリ合うのではないか」と。彼のひらめきは的確でした。(『月刊 MOE』127号, p.135)

ここでスーザン・バーレイのいう「教授」というのは、彼女自身が美術学校の卒業制作として「わすれられないおくりもの」の創作に取り掛かる段階に担当教員として指導あたっていたトニー・ロスである。卒業後の進路として絵本作家を志していたスーザン・バーレイに、同じく絵本作家としての活動もしていた氏の助言があったことをインタビューの中で明言している。上述の通り、話題には「たのしい川べ」がのぼっていたということが分かる。「たのしい川べ」という作品を氏が、どのような意図でスーザン・バーレイに提供していたのかという詳細は不明であるが、先述したイギリス人へのインタビューの回答のこととも合わせて、「わすれられないおくりもの」を分析する際に「たのしい川べ」とその作中に描かれる「アナグマ」表象の影響は考慮するべきであろう。

3 「たのしい川べ」について

3-1 作品の特徴と構造

本節では、「たのしい川べ」の作品の特徴をイギリス児童文学史とそこから見出される作品構造の問題から、「わすれられないおくりもの」との関連も含めながら検討する。

「「たのしい川べ」は動物ファンタジーの先駆的作品となり、(中略)自然と非現実世界を結びつけ、近代英国ファンタジー文学の世界を拓ける役割を果たし、後の作家たちに大きな影響を与えた。」

(藤本朝巳, 2004, p.105)と評されるが、どのような点が影響をもつものになったといえるだろうか。ケネス・グレアムによって「たのしい川べ」が世に発表されたのは1908年、「イギリス児童文学の発展期」(桂宥子、牟田おりえ, 2004)とも言うべき時期に生まれた作品である。同時期にはビアトリクス・ポター(1866-1943)の「ピーターラビットのおはなし」(1902)などの作品も生まれている。これらの作品を分析する枠組みとして青木由紀子(2009)は「動物の擬人化」を話題にしている。J.R.タウンゼント(1982)が「フィクションの世界で、人間化された動物は、長い伝統をもっている。(中略)西洋の民話は、人間化された動物たちであふれかえっている。」(p.178)というように、そもそも口承の文学という伝統の中では、西洋圏の文化に限らず日本の民話でも「桃太郎」や「かちかち山」しかり、動物が人間とコミュニケーションをとるという形式は往々にして

存在しているという事実は認められる（畑正憲，1973）。その一方で、青木（2009）は意識的に子どものために書かれたイギリスの「児童文学」というジャンルを認め、そこに登場する「動物」の「擬人化」を一つの形式とした上で「たのしい川べ」の動物の特徴を分析している。

ここで「擬人化」の度合いということを問題にしたい。先に挙げたような作品では人間とのコミュニケーションにおいて言語を介して行っているという時点で、どんな作品の動物たちも「擬人化」されていることにはなるが、青木（2009）は「擬人化」の度合い³を以下の三点から分析している。

- ①動物の擬人化（自然界とは異なる食文化形成が描かれるかどうか。例えば、動物の食卓にハムやスープなどが並ぶかどうか、実際の動物間の捕食関係が崩壊しているかないかなど。）
- ②動物と人間のコミュニケーション（人間と動物の住む世界の同居性が高いかどうか。）
- ③子どもの象徴としての動物
（括弧内は、太田補）

動物ファンタジーとして人気を博してきた作品は「たのしい川べ」以外にもアンナ・スウェル（Anna Sewell）（1877）「黒馬物語（Black beauty）」や、ラドヤード・キプリング（1894）「ジャングル・ブック（The Jungle Book）」など多く挙げられるが、「たのしい川べ」についてそれ以前の作品と比較するとその動物たちは、「はるかに人間化」（青木，2009，p.190）されている。先の青木の基準に照らしながら、一例として「黒馬物語」との比較を試みた。

【表1】「たのしい川べ」と「黒馬物語」の比較

	たのしい川べ	黒馬物語
①	非常に人間化されている。モグラは自分の巣穴をはなれてずっと地上で暮らしたり、ヒキガエルはゲートルを身に付け外とうを着て、髪までとかしたりする。	馬の一人称語りであるが、基本的に人語で人間とコミュニケーションをとることができない。食べるものも藁や麦など現実の馬が食べるものである。
②	擬人化が不自然にならないように、動物たちの世界は人間の世界から隔てられ、両者は直接交渉をもたないようになっている ⁴ 。	馬と人間は同じ世界に住む。馬は現実どおり人間に飼育され、その生涯が描かれる。
③	「毛皮をまとったわたしたち」ともいえる。（アナグマ以外の動物は）大人と子どもの境界を超えるような存在として描かれている。	馬が作中で成長するため、「こども」や「大人」というものを象徴するような存在として描かれてはいない。

（表は青木（2009）を参考に太田が作成した）

「たのしい川べ」におけるこのような「擬人化」は、イギリス児童文学の動物ファンタジーにお

³ 青木（2009）の基準から、より人間的な生活に近い描写が多く認められる程、「擬人化」の度合いが高いということにする。ただし観点の③については、擬人化の度合いが高いかどうかの尺度とは成り得ない。「大人＝人間／子ども＝動物」という構図があるかないかを青木が複数の作品を通して検討するための観点である。

⁴ ただし、「たのしい川べ」は三つの物語群が合体したような構造になっており、作品中盤にある「ヒキガエル」の冒険譚の部分は、人間の世界に「ヒキガエル」が入り直接交渉が発生している。

いて、一つの世界の描き方を提示したという意味で後の作品に影響を与えたといえる。ケネス・グレーアムの描いた擬人化された動物たちについて藤本（2004）は「彼は動物寓話に見られる単なる教訓を教えるためではなく、また風刺としてでもなく、自然と人生の中にある美と喜劇をさぐるために擬人化を用いた」（p.105）と指摘している。対して先に比較した「黒馬物語」における擬人化は、その風刺に目的があるものだといえる。J.R タウンゼント（1982）は「黒馬物語」を「戦争と狐狩りという二つの慣行を非難」（p.181）した風刺作品だと批評をした。馬の擬人化による一人称語りには人間世界を対照化するよう機能し、風刺の対象を作り上げたと解釈することができる。このように考えると、「たのしい川べ」の擬人化の特徴は、人間世界の対照化ないし風刺を中心にするのではなく、動物世界の人間化を図ることによって、読者がその世界に登場する人物に同一化したり共感したりすることができる点にある。特に上述の①や②の観点からみた作品の構造は重要な要素であり、「わすれられないおくりもの」もまた、作品内世界の構造として、同等の「擬人化」が用いられているといえるであろうか。

【表2】「わすれられないおくりもの」の擬人化の特徴

	わすれられないおくりもの
①	非常に人間化されている。例えばアナグマは手紙を書き、キツネはネクタイを締め、カエルはスケートを楽しむなど。
②	動物のだけの世界。森の仲間たちの話であり、人間の登場はない。

このことについてスーザン・バーレイ自身も言及している。『月刊MOE』（1998）において、日本の絵本作家角野栄子氏との対談の中で、「（動物を主人公にした作品の場合＝太田補）絵かきさんがその動物に服を着せるのか着せないのかということが大問題になるわけです。バーレイさんはその点についてどのようにお考えですか。」という質問に対して以下のように返答している。

ストーリーによるといってよいでしょう。『どうしてそらはあおいの？』では、ロバがロバらしく登場するお話ですから、4本の脚で駆け抜けたりするロバを描くことになります。こういった場合にはもちろん服を着せることはできません。また反対に服を着せることになる場合というのは、とくに動物を主人公にしなくてもよいストーリーのときでしょう。人間のキャラクターで描くのはストレートすぎる内容であるため、あえて動物で表現する場合です。服を着せることで、作品の中では動物ですが、人間に置き換えて考えることができるように意図されていると思います。新刊の『アナグマさんごきげんななめ』は人間の喜怒哀楽を伝えようとする物語なので、人間と同じ感覚で服も着させようと思いました。（p.91）

スーザン・バーレイの「アナグマシリーズ」の動物たちと「たのしい川べ」の動物たちは、創作上「動物であること」の意味を、読者がその世界に親しみ、同化しやすいようになる仕組みとしての機能を狙っているという点で重なる。ロジャー・セール（1990）が「たのしい川べ」について、「彼らはビアトリクス・ポターの動物キャラクターたちよりも人間そっくりで、個々の人間のタイプになっている。だが、人間だとは言えない。なぜなら、彼らが人間ではないために、グレーアムは自由にいろいろな要素を彼らにつけたすことができているのだし、しかもかれらに年齢とか素性

を与える必要もないし、彼らが罪意識をもつことがあるかもしれない過去とか彼らが予期しなければならぬ未来というものを与える必要もないからだ」(p.313)と分析している。「たのしい川べ」の「動物の擬人化」は、動物を動物らしく描くということからは距離をとりながら、人間の中の感情とか心の動きとか、「大人」になってしまったらひょっとして見えにくくなってしまふようなものを、「動物たち」に託すことによって、ある意味でより人間らしいものとして描き出し、読者がそれらの「動物たち」に同一化するための仕掛けであるといえる。そうしてみれば、「擬人化」はその先駆けとしてケネス・グレーアムが「ファンタジー」の装置として仕組んだものであり、「アナグマシリーズ」の世界もそれに倣ったものであるといえることができる。

3-2 「たのしい川べ」と「わすれられないおくりもの」の「アナグマ」像

森の仲間たちの話として、同様のパターンをみることのできる両作品は読者として、お互いの作品を想起させることが想定される。そうした場合、両作品における「アナグマ」のイメージは比較しておく必要があるだろう。両作品に登場する「アナグマ」のイメージに関連する語句を整理すると以下のようなものが挙げられる。対照を行うにあたっての底本としては、“BADGER’S PARTING GIFTS” (1984, Andersen Press Ltd.) と “The Wind in the Willows” (1993, David Campbell Publishers Ltd.) を用いた。

【表3】 作品中の “Badger” に関連する語彙対照

BADGER’S PARTING GIFTS	The Wind in the Willows
①dependable (p.1)	⑤Dear old Badger(p.15)
②reliable (p.1)	⑥simply hate society(p.18)
③very old (p.1)	⑦important parsonage(p.43)
④gently (p.16)	⑧kind-hearted gentleman, as everyone knows(p.69)
	⑨I knew that when people were in any fix they mostly went to Badger, or else Badger got to know of it somehow... (p.70)
	⑩Badger’s caustic, not to say brutal...(p.114)
※ “BADGER’S PARTING GIFTS” にはページ数の表記が無かったため、本編最初のページを p.1 としてページ数を対応させている。	⑪ what do you think your father, my old friend,...(p.220)

上記の【表3】に挙げた語句から、それぞれの作品の「アナグマ (badger)」について検討する。まず「わすれられないおくりもの」の「アナグマ」は「とても紳士的な頼れるみんなのおじいちゃん」である。①dependable と②reliable は冒頭の一文の中に並べて用いられている⁵。ともに意味としては「頼りになる、当てにできる」というもので、そういった一面が強調されているととれる。またこの話は「アナグマ」の死というのが大変大きなテーマともいえる作品であり、“Badger was so old that he knew he must soon die.” と自身の死を悟るほど年老いているというのが指摘できる。さらに「アナグマ」は、堅物な頑固おやじ的なおじいちゃんではなく、常に森の仲間が回想するのは、

⁵ “Badger was dependable, reliable, and always ready to help when help was needed.” (p.1)

④gently (穏やかに、優しく、親切に) な「アナグマ」である。

次に「たのしい川べ」の「アナグマ」を検討してみる。「たのしい川べ」は、「三つの物語群が合体してできあがっている」(青木, 2009, p.222)と言われる。確かに冒頭では、ほぼ無口のような「アナグマ」が物語途中からは大変雄弁になってくるなど、キャラクターとして揺れがあるようにも感じるところはあるが、今回は「たのしい川べ」全編を通して、「アナグマ」を形容している語句に注目してそれらを抽出した。⑤Dear old Badger と⑩の一節からは周りの動物たちと比べて年長者であるということが指摘できる。⑩は、友達の「ヒキガエル」に対して「アナグマ」が説教をしている場面にある文句であるが、「アナグマ」は「ヒキガエル」の亡くなった父親と友達であったことについてふれている。青木(2009)は「大人と子どもの境界を超える」ような存在として描かれている動物たちに言及しながらも「アナグマは別として」(p.222)というように、他の動物と違って「アナグマ」は常に「大人」側に立つ存在であることを指摘している。しかしながら、“old”といっても「わすれられないおくりもの」ほど老いているというわけではなく、ここでは実際の年齢ということよりも、相対的に年長者であるという事実が大切であるのだろう。

また⑥のように非社会的な存在という点も興味ぶかい。物語冒頭、主な登場人物である「モグラ」が巣穴からとび出して、まだ森の仲間のことをほとんど知らない頃にはじめに会った動物である「ネズミ」が「モグラ」に対して「アナグマ」を紹介している際にそのような表現が見られた。実際、「ネズミ」と「モグラ」がいるところへ偶然やってきた「アナグマ」は、ほとんど2人とは会話もせず立ち去ってしまう。平常あまり他者と関わらない空気感をまとった無愛想な存在として描かれているといえる。

そうは言っても、⑦⑧⑨に見られるように「頼りにされる」存在であることも確かである。⑦は、まだ「モグラ」が「アナグマ」とは知り合っていない時分に、他の動物たちからきいた「アナグマ」の評判を述べているものである。また⑧は雪の日に迷子になってしまった「ハリネズミ」の兄弟が「アナグマ」を頼って家へやってきた時の発言に見られた表現であり、⑨は「ネズミ」が遭難した「モグラ」の情報を得るべく訪ねた「アナグマ」に対して、訪ねた理由を述べている部分である。いずれも、「アナグマ」は森の仲間の中では評判になっているということがわかるものである。

そして、「たのしい川べ」と「わすれられないおくりもの」で決定的に異なるのが⑩のイメージである。本稿冒頭でもとりあげたイギリス人へのインタビューの中でも文学の「アナグマ」に対するイメージの中で“irritable”(怒りっぽい、短気な)というものが見られた。⑩は「アナグマ」が「モグラ」と「ネズミ」と共に「ヒキガエル」の傍若無人な振る舞いを正すべく、「ヒキガエル」を自宅に軟禁する場面に見られた表現である。⑥のような非社会的な部分があるように描かれている一方で、友達のためを思って真摯に向き合うという姿が印象的な登場人物でもある。物語中盤からは、とくに「ヒキガエル」との会話の中では叱責が多くみられたり、「ヒキガエル」邸を「イタチ」たちに占領された際は武装して奪還する計画を立てたりするなど、そういったところからは荒っぽいイメージが立ち上がる。

ここまで、両作品に見られる「アナグマ」に関する表現を比較してみたが、今一度整理してみると「森の仲間に頼りにされる知患者の年長者」というイメージは共通しているといえる。周りの動物たちに一目置かれ、みんなに頼られる存在である。自分から足を運んで積極的に他人と関わっていくような、ある意味でお節介になるようなことはしない。「たのしい川べ」における「ヒキガエル」とのやり取りは、そもそもが「ネズミ」や「モグラ」たちが「ヒキガエル」の素行に迷惑しているという相談を受けた「アナグマ」が起こした行動であり、決して一連のその行動が「アナグマ」

自身の自己肯定感を高めるためのものではないという点において、お節介ではないといえる。

ここまで見てきたように、「わすれられないおくりもの」は「たのしい川べ」に強い影響をうけていることは指摘できるが単純にその世界を借りて焼き直した作品ではない。スーザン・バーレイは「アナグマ」という動物を主人公にしながらその世界観を継承しつつそれに敬意を払いながら、トリビュートして「わすれられないおくりもの」を産みだしたといえる。次節では、「たのしい川べ」から受け継いだ「アナグマ」を前提にしながら、「わすれられないおくりもの」について、スーザン・バーレイが「アナグマ」という動物にこめた想いや、創出におけるオリジナリティというものをどこに見いだすことができるか考察していきたい。

4 「アナグマ」とその「死」の受容

「わすれられないおくりもの」において、なぜ死ぬのが「アナグマ」でなくてはならなかったのかを考えてみたい。再び雑誌『月刊 MOE』（1990）をみると、インタビューに次のようなことばを残している。

年老いたバヂャーが死んで、仲間に動物がとても悲しがる。けれど年老いたバヂャーは目に見えない大切な思い出を沢山残していったことに気づく（中略）（執筆の＝太田補）ちょうど六か月くらい前、大好きだった祖母が亡くなったのです。それまで親類で亡くなった人もいたんですけど、自分がまだ若かったせいか、それほど身内に“死”に対して強烈な想いを感じたことはありませんでした。けれど祖母が亡くなったとき、それまでのどんな気持ちよりも、深く私の心にしみたのです。

私は絵を描き上げれば描き上げるほど、祖母への想いを強く感じたものでした。個人的な意味でも想いは深く、もう六年も前に描いた絵本ですけれど、この絵本は、祖母に書いた、祖母のために描き上げた一冊と言えるかもしれません。（pp.135 - 136）

この創作にあたって、彼女自身の祖母の死というものが強く影響していることが分かる。作家論的な観点から考えれば、当作品において「アナグマ」とその死は必然のことだった。換言すれば、死ぬのは「アナグマ」でなくては意味がなかったのである。つまり「古い」と「死」を象徴的に表し得るのが「アナグマ」であったからである。

作者の生死観に関わって小林（2001）は「知や認識の位相において、あなぐまと他の動物たちみんなとは絶対者と非絶対者の関係にある」（p.207）と指摘している。「アナグマ」は年長者であり、知恵者である。他の動物たちとの間に確かに存在する違いは「アナグマ」が老いているということである。この点は相対的に越えられない壁であり、絶対的価値が生じている部分だといってよい。「わすれられないおくりもの」は冒頭から老衰した「アナグマ」が登場し、死後森の仲間たちが思い出として「アナグマ」を語ることによって「アナグマ」像が形成される。逆に言えば、残された者たちは懐古することしかできず、そのことによってしか「アナグマ」は語られないのである。この「アナグマ」像というのは、いってしまえば非常に断片的であるし、「美しいもの」にしか成り得ない。しかしながら、当然森の仲間たちは、「わすれられないおくりもの」の中では語られない「アナグマ」の一面というのを知っているはずである。語られることはないアナグマとの思い出が確かに存在していることによって、動物たちの語る思い出が、「別れ」という事実の重みを助長

するのではないだろうか。

また「わすれられないおくりもの」を読むにあたって、「アナグマ」の死を受け入れることは読者側にも要求される。いかなる生においても「老い」そして「死」という逃れられない運命があることはだれもが知っている。読者にとって重要なのは、「わすれられないおくりもの」の「アナグマ」が老い、死ぬということをもどのように受容し得るかという問題である。その一つとして「たのしい川べ」に見られた「アナグマ」像を考えてみたい。「たのしい川べ」の「アナグマ」は年老いてなどいかなかった。森のみんなに頼りにされ、ときには仲間のためならば少々手荒な手段もいとわない血気盛んな「アナグマ」像⁶というものが描き出されていた。「わすれられないおくりもの」には、すでに老いた「アナグマ」しかいない。つまり「わすれられないおくりもの」の中だけでは、「老い」ということがそのうちに抱えているものの重さが非常に分かりにくく、ないがしろにされてしまう。特に本稿冒頭でも触れたように、そもそも日本の読者にとって文学における「アナグマ」像への先行知識が乏しいことが指摘できる。先に見た「アナグマ」像を持たない読者ならば、下手をすれば「よく知らない白黒のかわいいおじいちゃん動物が森のみんなにやさしくした話」で終わってしまいかねない。換言すれば、赤の他人の死と親しい者の死では、その先生きる者たちにとってその「死」の受け取り方は全く違う意味をもつであろうということである。例えば「たのしい川べ」から得られるような「アナグマ」像ができあがっていれば、「わすれられないおくりもの」の「アナグマ」が老いと死を迎えるまでの過程を読者が想像することが可能になり、「死」あるいは「老い」の受容において、赤の他人の死では終わらない、森の仲間たちに同化する読みが可能になるのではないだろうか。

5 「アナグマ」像形成のための「アナグマシリーズ」の活用

前節までに、他作品における「アナグマ」表象をふまえることが、「わすれられないおくりもの」を読む際に、その主題ともいえる死の受容について質的な差をもたらす可能性があることを示した。「わすれられないおくりもの」の授業では、読者にとっての「アナグマ」の死をめぐる認識を教室でどのように生み出すことができるかということが課題になる。しかしながら、授業という現実的な場を考えた場合、日本語訳で約400ページある「たのしい川べ」を読むということは少々困難だろう。そこで本稿では一提案として、「わすれられないおくりもの」と同作者が描く「アナグマシリーズ」に焦点を当てて考察していきたい。「アナグマシリーズ」を用いる目的は、これまで検討してきたように「わすれられないおくりもの」の「アナグマ」を読む素地として多面的・立体的な「アナグマ」像を作るため、その材料にするということにある。

5-1 シリーズとしての成立

複数作品をシリーズとして扱おうとする場合、相互の世界につながりや依存関係が成立しなくてはならない。アナグマシリーズを発表の時系列順に並べると、①『わすれられないおくりもの』(1986)、②『アナグマのもちよりパーティ』(1995)、③『アナグマさんはごきげんななめ』(1998)という順になる。仮にシリーズとしての関連性があるとして、この3作品を「シリーズ」として捉えた場合、中心的な登場人物であるアナグマの「死」がシリーズの中ではもっともはじめに描かれてい

⁶ イギリス人のインタビューの中で「イギリス人なら、みんな5歳までには読んだことがある」物語として「アナグマ」が登場するロアルド・ダール(1970)「父さんギツネパンザイ(FANTASTIC MR FOX)」が挙げられていたが、その中でも「アナグマ」はキツネと協力して悪さをする。

ることになる。後を追う形で出版された2冊はスーザン・バーレイが一人で作ったものではない。『月刊 MOE』のインタビューで以下のような発言が見られる。

MOE:自分でお話を書くことは、これからはないのでしょか？

スーザン:最初のころは書いてみようと思ったのですが、あまりにひどいできだったので今は専門家にまかせることにしています。でも最近出た『Moll's Moon』（Mollはママ）は、実は大分以前、『Badger's Parting Gifts』を描いた頃に浮かんだアイデアを物語にしてもらったものなんです。（『月刊 MOE』215号, p.26）

「わすれられないおくりもの」以降二作では、そのテキストをハーウィン・オラムという人物が手掛けている。氏はスーザン・バーレイの師であるトニー・ロスとも『サンタさんへのてがみ』（ぼるぶ出版）という絵本を制作している。トニー・ロスとの出会いと「アナグマシリーズ」との関係は不明だが、師も含んだ交友関係がみられ、アナグマシリーズ創作に関してスーザン・バーレイとハーウィン・オラムは相互に作品世界を理解しあって作業を進められる関係にあったと考えてよいだろう。つまり、アナグマシリーズは、それぞれ独立した物語というわけではなく、登場人物や舞台の設定はシリーズを通してつながったものとして創作されているものと考えられることのできるということである。そのつながりについて以下詳述を試みる。

5-2 「アナグマシリーズ」と「モグラ」

ではシリーズとしてどのようなつながりを指摘することができるだろうか。『月刊 MOE』の記事の中でも指摘されているように⁷、「アナグマシリーズ」をつなぐ鍵の一つは「モグラ」の存在である。「わすれられないおくりもの」において、「森のみんなは、アナグマを愛していましたから、悲しまないものはいませんでした。なかでもモグラは、やりきれないほど悲しくなりました。」とあったり、最終場面にはモグラだけが登場し、「ありがとうアナグマさん。」という言葉を発表したりする。しかし具体的に「アナグマ」が「モグラ」と特別に仲が良かったようなエピソードが語られるようなことはない。本作中だけでは、どうして「モグラ」だけが特に悲しむことになったのかということは明らかにならないままである。そこで「アナグマシリーズ」に目を向けると、そこには二つの「アナグマ」と「モグラ」のエピソードを見ることができる。以下にあらすじを示す。

「アナグマさんはごきげんななめ」

いつも元気なアナグマが突然「つかれて、なにもかも、うんざりなんだよ」とふさぎこんでしまう。なんとか元気づけようと森のみんなは躍起になるがうまくいかない、ただひとりモグラは、アナグマの家で彼につれ添う。考えた末に、モグラは「じゅしょうしき」を考案する。森のみんなを「じゅしょうしき」に招待し様々な賞を授与する。中でもアナグマへの受賞は数えきれず、そこでみんなの感謝の気持ちを示そうとする。アナグマもその気持ちに気がついて、元気になる。

アナグマが立ち直るきっかけをつくった張本人はモグラであり、最終場面でもアナグマがモグラを抱きしめてしめくくられる。

⁷ 「MOE:でもバヂャーの物語のなかでもモグラがとても大切に扱われている気がしますが？スーザン:ああ、そうね。だってモグラは友達ですもの。」『月刊 MOE』215号,p.26

「アナグマのもちよりパーティ」

ある日アナグマが森のみんなをよんで「もちよりパーティ」を企画した。それぞれが何かを持って、アナグマの家に集まることになった。しかし、モグラは何も持って行くものがない。そこでアナグマに相談するが、アナグマは「きみだけでも」来てほしいという。モグラは特に用意もせず、普段着でパーティ会場へ足を運んだ。しかし、他の参加者には、後ろ指をさされ、全く楽しむことができず、モグラは落ち込む。そんなモグラをみて、アナグマは「いつもどおりのきみ、いつもの**ゆかいなきみ**」⁸を呼んだのだと声を掛ける。それで元気になったモグラはダンスを披露し、大うけする。アナグマは改めて来てくれたモグラに対してお礼を言う。

これらの作品にみる「アナグマ」と「モグラ」のやり取りは、「わすれられないおくりもの」において「モグラ」が悲しんだ理由を解き明かしてくれる部分であるといえる。「アナグマシリーズ」を相互に関連させて用いることによって、このつながりは読者にとって「わすれられないおくりもの」を解釈するための一つの視点になる。

5-3 シリーズにみる「アナグマ」

再び「アナグマ」の問題に戻る。先の「モグラ」の問題がシリーズを束ねる糸のようなものであるとするならば、「アナグマ」の問題もまたシリーズを貫く芯とならねばならない。「アナグマシリーズ」にみられるそれぞれの「アナグマ」から、どのような関係を見いだすことができるであろうか。

まず視覚的な要素である絵に着目してみると、「わすれられないおくりもの」の「アナグマ」はメガネ（おそらく老眼鏡）をかけ、杖をついているのに対して、他二作ではそれらが描かれていない。つまり相対的には「わすれられないおくりもの」でいう「みんなといっしょに走れた」若い頃の「アナグマ」であることが想定される。

一方本文テキストではどうだろうか。まずは一貫している点としては、それはやはり知恵者である点と、森のみんなにやさしい人気者であるという点あげられる。「アナグマのもちよりパーティ」では、パーティを主催しているのは「アナグマ」である。そしてパーティの参加について困った「モグラ」が相談している相手も「アナグマ」であった。手ぶらで参加したモグラは一時周囲の反感を買ったが、持ってきてほしかったのは「きみじしん」であったという「アナグマ」の一言は結果的にパーティを円満におさめた。「アナグマ」が森の仲間たちの中で果たす役割は大きい。

また「アナグマさんはごきげんななめ」では、最後の「ひょうしょうしき」において「アナグマ」は「森の道にいちばんくわしいことをたたえて」、「ききにさいし、どうふるまったらよいか、いつも知っていることをたたえて」、「いつも人を助けることをたたえて」、「もっともひつようとされ、たよりになることをたたえて」、「どんな気分の時にもみんなにあいさされていることをたたえて」と森の仲間たちから多くの感謝のこぼれを送られ表彰される。森の仲間たちがどのように「アナグマ」を捉えているかがここからうかがえる。

次に「わすれられないおくりもの」にはない「アナグマ」像としては、「アナグマさんはごきげんななめ」の「アナグマ」が挙げられる。この作品において「アナグマ」は、話しかけられるとう

⁸ 「アナグマのもちよりパーティ」の本文の中（p.13）では、表記上「ゆかいなきみ」という言葉を強調するために文字の大きさが、他の文字よりも大きく表記されている。本稿では、書体を変えることでその表現に対応させた。

るさがつたり、「ほっといてほしいんだ」、「つかれて、なにもかも、うんざりなんだよ」などと発言したりしている。「わすれられないおくりもの」では聖人のような印象さえ受ける「アナグマ」も「アナグマさんはごきげんななめ」では少々投げやりになった姿をみせる。これは「わすれられないおくりもの」の読者が作り出した「アナグマ」像に揺さぶりをかけることになるだろう。

以上にみた「アナグマ」像を「アナグマシリーズ」を通して捉えることで、「わすれられないおくりもの」のみでは読み取ることのできない「わすれられないおくりもの」の老いた「アナグマ」像の過去に目を向け、「死」や「古い」を読むことができるのではないだろうか。

6 おわりに

本稿では「わすれられないおくりもの」を中心に、特にその源流ともいえる「たのしい川べ」と「アナグマシリーズ」を合わせて分析することで、「わすれられないおくりもの」解釈における一提案をした。

終始「アナグマ」という表象にこだわって分析を進めてきたが、本稿を終える段階にあっても「アナグマ」という表象の分析は十分とは言えない。確かにイギリス人へのインタビューの中でも文学の中の「アナグマ」像は「たのしい川べ」を例にそのイメージが語られてはいたが、イギリスの児童文化に多大な影響があるとされる歌遊び「マザー・グース」にも「アナグマ」は登場していないようであるし、他作品における「アナグマ」というのも検討できなかった。そのような意味で本稿において検討できた「アナグマ」表象は断片的ではあるが、「わすれられないおくりもの」を読むにあたっては一つの視点が提示できたのではないかと思われる。

この作品を教材として学習するのは小学校3年生である。小学校3年生の読者にとって「死」というテーマはどのように受け取られ、思考として展開されていくのかを考えたとき、「死」をめぐるのは、一方で残されたものが逝く者を「語る」ということの意味を考える必要があるのだと思う。本稿では、小学校3年生に「死とは何か」といったような大きなテーマについて学ばせることが重要だと主張したわけではない。それは子どもたちにとっては手に余る問題であるかもしれない。あまり性急に答えを求めると、偏った視座から「死」を美化するような読みを導きかねない。本稿で示し得たのは一読者として死に逝く「アナグマ」をつぶさに見つめ、その「死」と向き合うことで、生きとし生けるもの誰しもが迎えざるをえない老いと死について考える視点を子どもたちが持つ出発点に過ぎない。

【参考・引用文献】

青木由紀子 (2009) 『七つのテーマから読み解く英米児童文学』 ミネルヴァ書房

池田広昭 (1989) 「マザー・グースに現れる動物名」 『神奈川工科大学研究報告・A, 人文社会科学編 13』 神奈川工科大学

岩谷美央 (2014) 「スーザン・バーレイ『わすれられないおくりもの』作品分析」 『国語論集』 11号, 北海道教育大学

ハーウィン・オムラ文／スーザン・バーレイ絵／小川仁央訳 (1995) 『アナグマさんのもちよりパーティー』 評論社

ハーウィン・オムラ文／スーザン・バーレイ絵／小川仁央訳 (1998) 『アナグマさんはごきげんななめ』 評論社

- 桂宥子、牟田おりえ（2004）『はじめて学ぶ英米児童文学史』ミネルヴァ書房
- キプリング作／中野好夫訳（1956）『ジャングル・ブック下』岩波書店
- ケネス・グレアム作／石井桃子訳（2002）『たのしい川べ』岩波書店
- アンナ・スウエル原作，ジョン・リーダー絵／足沢良子訳（1978）『こども世界の名作2 黒馬物語』ぎょうせい
- ロジャー・セール著／定松正訳（1990）『ファンタジーの伝統』玉川大学出版部
- ロアルド・ダール作／田村隆一／米沢万里子訳（1976）『父さんギツネバンザイ』評論社
- J.R.タウンゼント、高杉一郎訳（1982）『子どもの本の歴史 英語圏の児童文学上』岩波書店
- 田中実／須貝千里編（2001）『文学の力×教材の力 小学校3年』教育出版
- 臺野芳孝（2002）「小学校中学年の分析と総合のよみー「わすれられないおくりもの」の教材分析
--スーザン=バーレイ作 小川仁央訳(教育出版 小3下)」『研究紀要』4号，科学的「読み」
の授業研究会
- 高原典子（1991）「『わすれられないおくりもの』をめぐって」『幼児の教育』90号（2），日本
幼稚園協会
- スーザン・バーレイ作、絵／小川仁央訳（1986）『わすれられないおくりもの』評論社
- 畑正憲（1973）「私の民話論 民話の中の動物たち」『日本の民話1 動物の世界』角川書店
- 平野孝子（2003）「『わすれられないおくりもの』を中学生に読ませるー詳細な読解を生かして」
『月刊国語教育』23巻2号，東京法令出版
- 藤本朝巳（2004）「第4章 児童文学の発展 ケネス・グレアム」『桂宥子、牟田おりえ（2004）『は
じめて学ぶ英米児童文学史』ミネルヴァ書房（pp.105-106）
『月刊 MOE』第12巻第2号通巻127号（1990,5）白泉社
『月刊 MOE』第19巻第6号通巻215号（1997,9）白泉社
『月刊 MOE』第20巻第5号通巻226号（1998,8）白泉社
- Kenneth Grahame（1993）“The Wind in the Willows” David Campbell Publishers Ltd.
- Susan Varley（1984）“BADGER’S PARTING GIFTS” Andersen Press Ltd.
- 全国学校図書館協議会 <http://www.j-sla.or.jp/contest/youngr/pastbook/314019851994.html>
（2016.04.30）
- 「NHK ONLINE」 <http://www.nhk.or.jp/nature/library/tanken/animal/009.html>（2016. 04.30）

（広島大学大学院博士課程前期2年）